Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

幼児の家庭，地域，および幼稚園生活における自然とのふれ合いに関する研究(I)

○池山和子　島田俊秀
（鹿児島大学　教育学部）

〔目的〕

幼児をとりまく環境や遊びの近年の変化をかんがみると、幼稚園教育においてさらに幼児を自然に親しませ、自然と関わっての遊びや活動を発展させるよう、保育の展開を意図することが必要と思われる。本研究は、幼稚園教育における自然とのふれ合いを図り、望ましい保育の在り方について研究を進めるための基礎資料として、現在の幼児と自然とのふれ合いの実態を知る目的で行った。

〔方法〕

鹿児島県下の環境の異なる3つの幼稚園児の保護者を対象に質問紙法による実態調査を行った。

(1)対象　鹿児島市内国立F幼稚園：園児数69名（男児35名女児34名）、海岸と砂丘・松林に隣接する公立I幼稚園：園児数152名（男児68名女児84名），田園丘陵地帯にある私立K幼稚園：園児数135名（男児78名女児57名），各園園児の保護者。

(2)実施期間　昭和63年10月～11月に各園を通じて配布回収した。

(3)質問項目　幼児と自然とのふれ合いの実態に関してできるだけ多くの角度から具体的な生活実感に近い回答が得られるよう14問の質問を設け、できるだけ選択肢を設けるよう努めた。

フェイスシート：年齢，性別，居住地域，住宅形態自然環境，集団生活経験年数，出生順位，祖父母との同居，記入者など11問。

質問(1)・(3)・(4)……遊びの場所に関する質問。質問(4)は具体的な場所をいくつか挙げ、各々について「よくある」「時々ある」「殆どない」の3段階評定によって回答を求めた。

質問(5)・(6)・(7)・(12)は、自然と直接ふれ合う遊びや体験の有無、頻度に関する質問で、各々具体的な遊びや行動・体験を挙げ、質問(4)と同じく3段階評定による回答を求める。

質問(8)……天文、植物、物理現象など自然の事象を挙げ、大人に質問したり話し合ったりした経験・頻度についての質問で、質問(4)と同じ3段階評定。

質問(9)・(10)・(11)は、各家庭で生き物・植物を飼育栽培したことがあるかどうか、具体的にどのような種類のものを飼育・栽培したかについての質問。質問(11)では子供がかわいがっていた生き物の死の体験について質問した。

質問(14)……各家庭で自然とのふれ合いに関係あると思われる事柄で子供に意図的にさせないようにしたり、禁じたりしていることを、選択肢を15設けて選択を求め、できるだけ理由も記入してもらうようにした。

質問(1)～(17)には、記入者の幼少のころに関して、現在の子供に対する問いと同じ問いの回答を求めた。

また各質問に※その他を付し，記入者の個人的な事柄や意見、感想を自由記述で記入する欄を設けた。

〔結果〕

回収率100%（356人）

園別対象児数とフェイスシート項目別対象児数を円グラフで図1～12に示す。図中（）内の数字は%を示す。

（満年齢3歳児については3名と数が少なかったので考察の対象からはずし、353人によって考察を進めた。

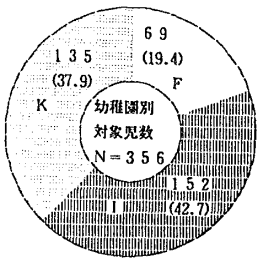

図1 園別対象幼児数

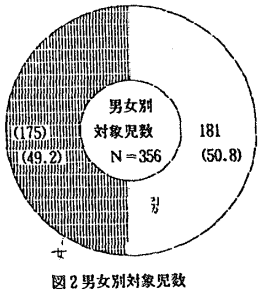

図2 男女別対象児数

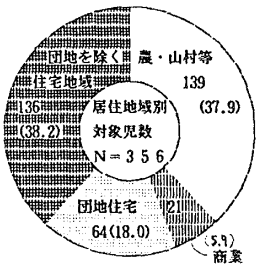

図3 居住地域別対象児数

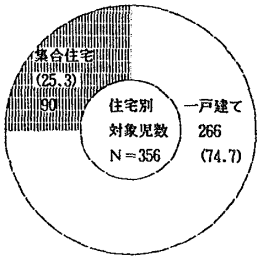

図4 住宅別対象児数

NII-Electronic Library Service

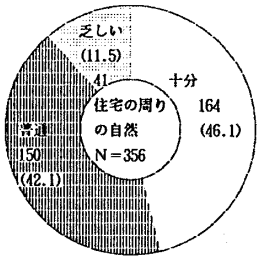

図5 住宅の周りの自然別対象児数

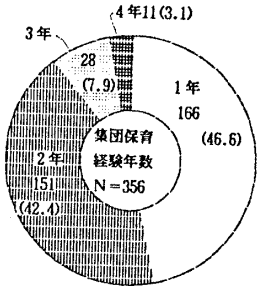

図6 保育経験年数別対象児数

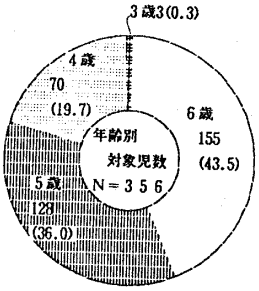

図7 年齢別対象児数

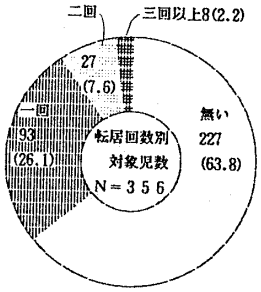

図8 転居回数別対象児数

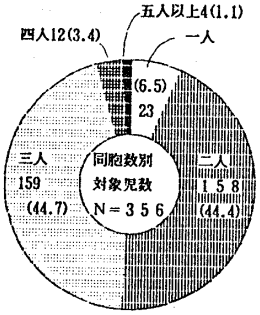

図9 同胞数別対象児数

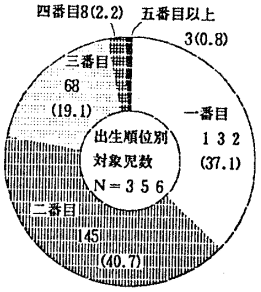

図10 出生順位別対象児数

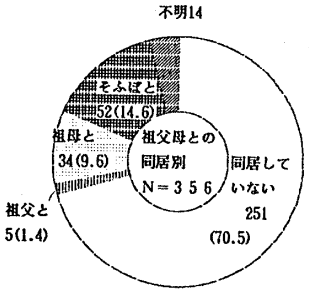

図11 祖父母との同居別対象児数

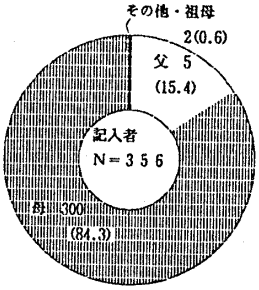

図12 記入者別対象児数

(1) 全体的な傾向

1. 室内遊びを戸外遊びよりはっきり好む子供は1割弱である。
2. 主な遊び相手が同年齢の友達の子供がほぼ半数きょうだいの場合が約3割、異年齢の友達の場合1割。1人遊び・親や大人を主な遊び相手としている子供は約6分である。
3. いつも遊んでいる場所としては、自分の家の庭友達の家の庭を挙げた者が7割以上である。その他の主な遊び場所としては、グラウンド・公園などの整地された土地を半数強が挙げている。道路を挙げた者約3割。野原など整地されていない土地を主な遊び場として挙げた者、2割弱田畑を挙げた者1割弱で、その他山・川・海を挙げた者は少数で、むき出しの自然を主な遊び場としている子供は数が少なくなっていると思われる。
4. 幼児達がよく遊ぶ場所としては、砂場・広い芝生や草地・小人数でゲームなどのできるちょっとした空地・アスレチック・ブランコなどのある遊園地を挙げることができる。あまり遊ばない場所としては、建築・工事現場の近く、山林森など又リルのあるところ、土手・崖などが挙げられる。
5. 自然とふれ合う遊び・体験：泥・土いじり，砂遊びは8割強の子供がよく経験している。他によくみられる遊びとしては、木でっぽう・色水作りといった水遊び、小石・貝がら・木の実などを集める遊びが挙げられる。逆に少ないものとしては、木のぼりや草の上を転がったりするような、自然物と身体全体を動かして直接ふれあって遊ぶ遊びは、4割強の子供が殆どないと答えている。

   遊び以外の行動・体験として多いものは、はだしで庭や外を歩いたこと、水をかけあって遊んだこと、外からもち帰った生き物を自分で飼うことなどが挙げられる。逆に少ない行動・体験としては、森や洞くつの探検、高いへいや崖を歩くこと、野生の植物や木の実などを自分でとって食べるなどがある。
6. 大人に質問したり、感動して話したりする自然に関する事象としては、生き物・動物に関したことが最も多く4割弱の子供がよくあると答えている。次に多いのは、雨・風・雲・虹などの気象に関したことをよく話すと回答した者が3割弱であった。あまり話にのぼらないものとしては、水の流れや浮力・光りの反射・空気の揚力など物理現象に関したこと、温泉や溶岩、火山灰など岩石に関することで、6割以上の子供が殆どないと答えている。

NII-Electronic Library Service